

南関東における「びゃく」地名の由来

相原延光・井上公夫 (本文 68 ページ)



口絵 1 江の島の「びゃく」の地点 (藤沢市教育文化センター 2004 に追記)



口絵 2 葉山町の「びゃく」と「じゃく」の分布 (Goole Maps の上に追記)

南関東の「びやく」という地名の由来について

相原延光・井上公夫

関

筆者らは、『関東大震災と土砂災害』⁽¹⁾を著し、3回の現地見学会を行つてきた。⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾2013年10月16日の伊豆大島・元町での激甚な土砂災害発生直後に、現地調査を行つた。⁽⁵⁾⁽⁶⁾大島図書館で元大島測候所の調査官・田澤堅太郎氏が書かれた東京七島新聞⁽⁷⁾と朝日新聞⁽⁸⁾の記事などを読んだ。その後、田澤先生のご自宅で伊豆大島について色々教えて頂いた。上記の新聞記事で、大島は火山噴火だけでなく、土砂災害にも注意すべきことを喚起していた。立木⁽⁹⁾によれば、「元町集落はかつて新嶋と呼ばれており、文禄年間（1592）

96年）に「びやく」に押されて500mほど北側の現在地に移転した」という。先生は長らく気象庁大島測候所に勤務され、1986年の噴火に直面し、大島火山博物館の設立時の展示などに奔走された。現在も大島に在住され、丹念に大島各地をスケッチされ、2014年に『火山 伊豆大島スケッチー 改訂・増補版』⁽¹⁰⁾を著された。

「びやく」とは豪雨のため、山麓から地下水が噴出し、土砂、立木、岩石などを交えて押し流す山津波などのことである。

関東地震による被災地域を調べてみ

ると、今ではほとんど使われていないが、南関東の広範囲にびやくという地名が使われていたことを知った⁽⁴⁾（地理61巻3月号の口絵⁽⁴⁾）。このため、びやくの事例を追加調査するとともに、びやくの語源を調査した⁽¹²⁾⁽¹³⁾）ので紹介する。

1. 方言としての「びやく」の研究

南関東の方言「びやく」を初めて紹介したのは、昭和11（1936）年の柳田國男編『伊豆大島方言集』⁽¹⁴⁾である。柳田の民族学の原点は徹底的な現地調査に基づく地名研究にあるといっている。すなわち、絶滅しかかっている日本各地の古い地名を掘り起こすことにより、文字に書かれた記録から過去に関する情報を取り出すことであつた⁽¹⁵⁾。敬愛していた南方熊楠との2年間にわたる意見交換は生涯にわたる民俗学研究の重要な転機となつた⁽¹⁶⁾。旅と採集の離島研究をする中で、伊豆大島の「び

やく」を見出したが、ことばの起源がわからないとしている。

柳田國男⁽¹⁴⁾によれば、

・ビヤク…崖の斜面。

・ビヤクガクム…崖が崩れる。

・ビヤクガオス…山ずりして土砂が押出す。

藤井正二・元町読書会⁽¹⁷⁾によれば、

・ビヤク…山津波（神奈川・千葉・茨城・東京多摩などでは「はまことば」として使われている）。

藤井伸⁽¹⁸⁾によれば、

・ビヤク1…崖の斜面、崖そのもの。

・ビヤクガクム…崖が崩れる。

・ビヤクガオス…やまずり（活断層のことか）して土砂が押出す。

・ビヤク2…山津波、土石流、山崩れ、鉄砲水。

「びやく」は一般名詞としての「崖」そのものを指すか、「崖崩れ」を指す場合がある。「びやくがくむ」「びやくがおす」の場合は一般名詞「崖」＋が

（助詞）＋くむ、おす（動詞）という使い方と考えられる。

柳田は地名研究者に対し「地名を宛字するときの古来の用字法の誤謬」⁽¹⁵⁾の中で地名はすべてカタカナあるいはひらがな表記することで地名の起源を宛字からもたらされる先入観を排除する必要がありとしている。しかし漢字研究の第一人者の白川静は、柳田の民俗語彙の資料収集を基本とした柳田の方法を踏まえながらも柳田とは反対に中国の民俗研究には漢字の起源と系譜を迫ることが有効だと説いている⁽³³⁾。

2. 「びやく」の分布と土砂移動形態

これまで「びやく」が確認された⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽¹²⁾地点を地理61巻3月号の口絵1に⁽⁴⁾示した。

①伊豆大島西部…テフラ（火砕物）の崩壊、台風による大雨で土石流発生。

②三浦半島北部（江の島、逗子、浦賀）…逗子シルト岩（北斜面は流れ盤）が地すべり、葉山層の凝灰質砂岩（南斜面は受け盤）が崖崩れ。

③丹沢山地（神奈川県山北町箒沢）…マサ化したトナール岩が崖崩れ。

④多摩丘陵（東京都町田市）…関東ローム層（粘土質火山灰層）の崖崩れ。

⑤富士火山北麓（山梨県河口湖町）…火砕物などの崖崩れ・土石流堆積物。

3. 江の島の「びやくがくむ」

発生年は特定できないが、島の南東の中津宮下急崖（約50m）が度々崩潰し、幼少時に母親から「びやくがくんだ」というのだと教わったという老女（明治38（1905）年生れ）の証言⁽²⁰⁾⁽²¹⁾がある。大橋左の裏山が明治23（1890）年4月15日の豪雨で崩潰して一家5人が死亡したという石碑⁽²⁰⁾はこの証言とほぼ同時期である。大正9（1920）年9月30日の台風の豪雨で「延



図2 小地名「大崩」「蛇場見」「棚田」の風景写真
神奈川県葉山町下山川中流域・日陰山の北斜面

土地「ビヤク田」がある、中流域では丘陵の南斜面には以前「びやくがくむ」といつていた「大崩^{おおくずれ}」、大和言葉の地名である「崩^{くど}」や西日本各地に見

られる治水神(後述)に由来する「蛇場見^{ばみ}」や「鍋壊^{なべこわし}」がある。さらに棚田の美しい風景の中心に稲荷神社が鎮座している。

5. 言語学的考察

「びやく」を漢語辞典で引くと、白、百、佰、帛、柏、僻、璧、辟などと多数出るが、「突然開いて横に広げる」とか「裂ける様子」を示す漢字「關」に注目した。字義は「ひらく」「のぞく」「さける(裂)」で、「呉音」では「びやく」、「漢音」では「へき」と呼ぶ。発音は「入声」なので、アルファベットの表記すると「byak」(日本人には「k」は声にならない)、中華台北の発音に近いとされる。日本語では「byak-u」となる。「關^{びやく}」は形声文字で「門」と「辟」が組み合った形である。「門」には「生まれ出る所」「陰

部」という意味が生じている。⁽²⁵⁾

音符の「辟」の字体は3つの部分からなっている。部首の「尸」は「しかばね」を意味し、不完全な人間の象形で、つくりの「辛^{はつ}(鍼)」は傷口を意味する。すなわち、字義は「鍼を挿して一氣に引き裂くような(痛みを伴う)現象」であるが、転じて「入れ墨」の意味もあり、生後間もない赤子に厄よけの意味で行われた風習もあるとされる。また、殷代にはその際に使われる刃物として「辛」があり、戦争捕虜を家内奴隷にするために足首を切り落とすという処置が行われており、「辟」と呼んでいた。⁽²⁶⁾「辟」は「足首が落ちるがごとく、崖が落ちてくる」という意味に解釈される。

「びやく」の語源は中国大陸起源の象形文字である呉音で発音されたことばで、孤立語「辟(關) 裂ける」が骨格となつて、膠着語「びやくが」と変化し、くむ(崩む…千葉県の方言で

「国字」という訓読みがされ、最後に助詞「が」加わり、屈折語「びやくかくむ」という変遷を経て、日本語の方言として定着したと解釈できる。

6. 歴史学的考察

①漢字伝来と上流階級での公用語

「日本書紀」「古事記」には「論語」「千字文」記されていると書かれていることから、漢字を最初に日本に伝えたのは4世紀末の応神天皇の御世に百濟より渡来してきた王仁^{わに}とされている。倭の歴代の王は南朝の諸王朝に遣使し、朝貢し、倭国王としての地位の確認を求め、同時に多くの造形文化や漢字・漢文の摂取に努めた。公用語は「呉音」の漢字であり、5世紀後半までには日本人は漢字を受容し使用していたと考えられている。

その後、「呉音」は7世紀以後遣唐使等により実用性を否定され、洛陽・長安の発音である「漢音」を正統とす

る教育が導入された。8世紀末の延暦年間には儒学・仏教の漢字発音を漢音に統一する試みがなされたが、仏教界の反発が強く、ほどなく「優れた学力の僧侶には呉音の能力を要求しない」という形で、後退を余儀なくされた歴史がある²⁷。このような事情から、現在は限られた地域にのみ残存する方言²⁸となったと考えられる。

②海洋民の生活と使用した言語

三浦半島の考古学の知見では、三浦半島の海食台に旧石器時代の遺跡や縄文前期～中期の住居遺跡が認められるが、縄文晩期(3000年前)になるとほとんど生活の痕跡がない。寒冷化が始まる縄文晩期には人々は一時期いなくなった。

そして弥生時代前期(4世紀後半)には神奈川県で最大の長柄桜山古墳群(平成14(2002)年国指定)が現れた。この古墳は、旧東海道(ヤマトから相模を抜けて東京湾を渡り上総か

ら下総へたどるルート)の陸路と東海地域から伊豆・三浦半島にかけての海上交通の要所に作られた。「前方後円墳」は行きかう舟の灯台の役目を果たしていたと考えられている。また、リーダー格となっていた先進的な海洋民の技術集団が存在することが推測される²⁹。弥生時代中期には塩田への流路としての三崎道が通じている。古墳時代後期(5～6世紀)には下山川の下流域にムラが形成されていた。

活発な海洋民として考えられているのは安曇氏(秦氏^{はた})という航海術を持つ海人族で、秦は、朝鮮語の海を意味する「パタ」の転訛ともいう。中国春秋戦国時代(紀元前473年)(日本では縄文時代晩期)に中国南部から逃れた難民集団でタタラや農耕、灌漑技術などもたらした。4世紀初頭には九州から四国に進出し、「呉音」を使っていた。彼らは古代の呪術として、生まれたばかりの男子に入れ墨をする習

慣（文身）があつた⁽³⁰⁾。前述した漢字の説明で「辛」は刃物の他に、「入れ墨」を額に記すという意味もあつた⁽³¹⁾。古事記や日本書紀には、倭人の特徴として「鰐^{けい}」（さけると訓読みする）面⁽³²⁾、すなわち入れ墨をしていたことが書かれている。

聖徳太子ゆかりの京都市右京区の広隆寺は推古天皇（603年）に建立されているが、建立者である秦河勝^{はたのかかつ}を祭神とする「大酒神社」は古くは「大辟神社」「大避神社」と書かれたとあり、「おおさけ」と読ませている。当時は呉音で「だいびやく（dai-byak）」と呼んでいたが、訓読みが伝わっていると思われる。

大酒神社の祭神は、『延喜式』『広隆寺来由記』の記述から、秦始皇帝であるとする見解があるが、広隆寺の創建に関わった秦河勝を祀った秦氏は東アジアの重要な位置にあつた人物である。

7. 伝承と災害

安曇氏のルーツは中国揚子江（長江）流域に住む海上生活をする種族である。彼らの社会に伝わっている説話は「天地開闢」である。中国古代の漢字研究者白川静は、漢字の生い立ちと背景について次のような解説を行っている⁽³⁰⁾。すなわち、「昔天地が別れる前に、世界は一つの混沌であつた。その中に「盤古」が生まれた。盤古は一日に一丈ずつ大きくなり、1万8000年ののち、天地は今のすがたになった。盤古の屍体からは自然が生まれた。気は風雲となり、声は雷となり、目は日月となり、四肢五体は四方四極・五岳となり、血液は江河をなし、筋脈は地理となり、肌肉は田土を形成し、ひげは星辰、皮毛は草木となった。」

盤古系の南方神話に対し、北方には「洪水説話」がある。黄河上流の氾濫地帯における種族が伝えたものである。

この洪水説話を発展させ神話としたものに「道教神話」がある。「天地陰陽の気を受けて生まれた盤古真人は、自ら元始天王と称して、混沌のなかに浮遊していた。やがて天地が分かれ、地の岩から水が流れ出た。原虫が発生し、やがて龍が生まれた。その後、流水の中から人間の姿をした太元玉女が生まれた。彼女は太元聖母と名乗り、元始天王と気を通じて天皇を産んだ。」⁽³¹⁾

治水神としての「禹王」の知名度は高い。「禹^う」は夏の国を建てたといわれる王の名前で黄河の洪水を治めて大功があり、聖人となり、信仰集団の墨子学派を作った。「禹」は爬虫類の一種（虫）をかたどり、音形上は雨に通じて、雨水の神をあらわす。「禹」の神像は人面魚身をしており、時には「龍」形となつてあらわれ、洪水で河口に進むときは龍が首を上げて海に向かつて進むと考えられている⁽³²⁾。日本人

からみると「禹王」は「渡来人」であり、治水神としたのは司馬遷の「史記」である。「治水神・禹王」は武士階級へは儒学書で、庶民には寺子屋における刊行物の朗読を通して広まっていた⁽¹⁹⁾。

盤古神話や禹水伝説などは、水害・土砂災害の多い気候・地理条件を有する日本の文化に少なからず影響を与えたことは間違いない。



写真2 京都市右京区太秦の広隆寺と大酒（大辟、大避）神社

8. まとめと今後の研究課題

「びやく」は「開く神」という自然信仰をもつ呉音を話す海洋民が、畏敬の念をもって災害に関する地名として「びやく開」と名付け、伝承として残した可能性があることを記した。方言は層序学的秩序を持って存在する⁽¹⁵⁾。今も、確実に絶滅しつつある言葉があることに肝に命じて、さらに「びやく」の記述を発見し、考察を深めていければ良い

と考えている。また、「びやく」という土砂災害を表す地名を防災対策に活用していくべきであろう。さらに「びやく」という地名を探しているの、ご存じの方は教えて頂きたい。

本稿をまとめるにあたり、「びやく」という土砂災害事例調査のきっかけを与えて頂いた田澤堅太郎先生に御礼申し上げます。関東大震災と土砂災害に関する現地見学会に参加された方からも多くの事例を教えて頂きました。

「びやく」の事例を現地調査し用語の起源を分析するに当たり、各地の教育委員会や博物館で様々なご教示を頂いたことに感謝致します。

【引用・参考文献】

- (1) 井上公夫編著(2013)『関東大震災と土砂災害』古今書院、口絵16頁、本文226頁。
- (2) 井上公夫(2013)「関東大震災・横浜の現地見学会報告—1923年9月1日のプールの逃避行ルートを歩く—」地理58—12、口絵8頁、本文82—91頁。
- (3) 井上公夫・相原延光・笠間友博(2014)「関東大震災・現地見学会、秦野駅から震生湖

- 周辺を歩く」地理60—2、口絵6—7頁、本文68—78頁。
- (4) 井上公夫・蟹江康光・相原延光(2016)「関東大震災による横須賀・浦賀地区の土砂災害」地理61—3、口絵4—5頁、本文80—87頁。
- (5) 井上公夫(2014)「伊豆大島・元町の土砂災害史」地理59—2、口絵8頁、本文10—19頁。
- (6) 井上公夫(2014)「伊豆大島・元町の土砂災害史と「びやく」砂防と治水219、85—90頁。
- (7) 田澤堅太郎(1988年1月1日)「下高洞遺跡」東京七島新聞1260号。
- (8) 田澤堅太郎(2013年11月12日)「大島忘れていた「びやく」朝日新聞記事。
- (9) 立木猛治(1961)『伊豆大島志考』伊豆大島刊行会、85頁。
- (10) 田澤堅太郎(2014)『火山 伊豆大島スケッチ—改訂・増補版—』之潮、112頁。
- (11) 井上公夫(2015)書架「火山 伊豆大島スケッチ—改訂・増補版—」地理60—7、117頁。
- (12) 井上公夫・相原延光(2015)「「びやく」という土砂災害の事例紹介と分布について」第32年度歴史地震研究会京丹後大会講演要旨集、45頁。
- (13) 相原延光・井上公夫(2015)「「びやく」の言語学的調査の紹介」第32年度歴史地震研究会京丹後大会講演要旨集、46頁。
- (14) 柳田國男編(1942)『伊豆大島方言集』
- 図書刊行会、87頁。
- (15) 柳田國男(1936)『地名の研究』講談社学術文庫。
- (16) (公財)神奈川文学振興会(2015)『生誕140年柳田國男展展示解説』29頁。
- (17) 藤井正二・元村読書会(1987)『島ことば集—伊豆大島方言集—』第一書房、223頁。
- (18) 藤井伸(2013)『しまことば集—伊豆大島方言—』藤井晴子、伊豆大島文化伝承の会、362頁。
- (19) 王 敏(2014)『禹王と日本人「治水神」がつなぐ東アジア』NHK出版、66頁。
- (20) 藤沢市教育委員会(1995)「江の島の民俗」247—249頁。
- (21) 衆 智子(2008)「江の島の民話—地名と伝承—藤沢地名の会会報66、3頁。
- (22) 藤沢市教育文化センター(2004)『藤沢の自然5 みどりの江の島』114頁。
- (23) 葉山町(2015)『町制施行90周年記念 葉山町の歴史と暮らし』50—51頁。
- (24) 鎌田正・米山虎太郎(2001)『漢語新辞典』大修館。
- (25) 笹原宏之(2014)『訓読みのはなし—漢字文化と日本語』角川ソフィア文庫、67頁。
- (26) 落合淳思(2014)『漢字の成り立ち』筑摩選書、193頁。
- (27) 笹原宏之(2014)『漢字の歴史—古くて新しい文字の話—ちくまプリマー新書、104頁。
- (28) 笹原宏之(2013)『方言漢字』角川選書、
- 8頁。
- (29) かながわ考古学財団編(2015)『海浜型前方後円墳の時代』同成社、115頁。
- (30) 白川静(1979)『中国古代の文化』14頁、49—59頁。
- (31) 白川静(1970)『漢字—生い立ちとその背景—』岩波新書、74頁、114頁。
- (32) 奈良県立橿原研究所附属博物館編(2013)『海でつながる倭と中国—邪馬台国の周辺世界』新泉社、250頁。
- (33) 立命館大学白川静記念東京文化研究所編(2013)『白川静を読むときの辞典』208頁。

あいはらのぶみつ・関東学院中学校高等学校

1950年神奈川県生まれ。横浜国立大学教育学部地学科卒業。元神奈川県立教育センター研修指導主事。専門は岩石学、火山地質学。地学教育。県立神奈川総合高等学校非常勤講師。

いのうえきみお・一般財団法人砂防フロンティア整備推進機構・技師長 1948年東京都生まれ。東京都立大学理学部地理学科卒業。京都大学論農博1993年。専門は防災地形状学。首都大学東京、筑波大学非常勤講師。中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会「1707富士山宝永噴火」、「1847善光寺地震」、「1858飛越地震」、「1923関東大震災」、「1947カスリーン台風」、「1707宝永地震」報告書分担執筆。